

福井大学学術校への派遣留学（交換留学）月例報告書（5月分）

留学先大学：貿易大学

氏名：小泉春樹

友達とのつながりがさらに強まり、広がった5月。授業が始まった5月。悩みに悩んで頭がパンクした5月。頑張ろうと思えた5月。

まずは、人との繋がり。

5月の前半は、先月の月例報告書にも書いたとおり、授業はなかった。何をしていたかといえば、先月に引き続きベトナム人の学生団体の活動に参加したり、そのほかの時間はその活動を通してできた友達とたくさん出かけたりしていた。そう、みんな優しく、「ご飯行こう！」「ここ遊びに行こう！」って、いろんな子が誘ってくれた。例えばティンさん。25歳で就職活動中。日本に1年半語学留学していたため、日本語はペラペラ。家が近いこともあって、出かけるときはいつも家までバイクで迎えに来てくれる。新しいショッピングモールのオープンの日には二人で覗きに行ったり、他のベトナム人の友達も誘って鍋食べ放題や焼き肉食べ放題に行ったり。本当にいい人。面白いし、最高。また今度、鍋食べに行ったメンバーでエッグコーヒー飲みに行くのとホアロー収容所にも行こうって話している。フオン、リン、モモちゃん、へちゃん、アインさん、ジエップ、カムビンさんもよく誘ってくれる。何かのイベントがあればそこにも呼んでくれ、外に出ることは4月より断然増えた。これは余談になるが、ベトナムで友達とご飯に行くとき、結構な確率で友達の友達を連れてきてくれる。こういう文化なのか。きっと男二人きり、男女二人きり、よりももう少し人がいた方がちょうどいいからだとは思いますが、日本ではそんなしょっちゅう友達の友達とご飯に行くことはなかったように思う。そんなわけで、VJSC（ベトナムの学生団体）の活動とはべつに、プライベートでも数珠つなぎに友達が増えていった。この話の最後に、この出会いが生んだある機会について書き残しておこうと思う。僕は「はるき食堂」というお店を趣味で1年半前から開いており、そのことを知った友達からとあるオファーをもらった（この食堂についての説明は省略する）。その友達はベトナムのNGOで活動しており、「Quang Binh州の子ども教育支援金を集めるために、料理教室を開いてほしい。」とのことだった。もちろんOK。実はその子には以前にも音楽ライブを開催してほしいと頼まれたことがあった。それは、趣味でアコギをずっとやっている、ということがあったの依頼であったのだが、その時は予定が合わず断ったのだ。誘われたら、頼まれたら、断らない。チャンスがあれば必ず掴んでみる。中学の時から何気なく大事にしていたが、やはりチャンスや機会は掴むと次のチャンスにつながっており、このお料理教室もきっと次の大きな何かに繋がっているのだろうと感じた。ということで、6月

15日に30人ほどを集めて、肉じゃがとおにぎりを作るイベントを開くこととなった。詳しいことは、来月分の報告書に記載する。

5月の後半からは、また授業が再開した。貿易大学に来た理由の一つである、Development Economicsの授業だ。この授業は福井大学でいう集中講義のような形で開かれるため、1か月間毎日2限の時間に受けるものとなっている。教授は、アメリカの大学から来ているインド出身のとても気さくで優しい人。そしてクラスは相変わらずベトナム人が9割9分を占めている。授業スタイルは他のものと変わらないが、すごくやりやすさを感じる。授業開始初日あたりはやはりしんどかった。けれど、ちょっとだけがんばってみた。そして、いい方向に進むようになって、グループでの作業も問題なくこなすことができた。最初のピリオドの授業は、努力しきることができなかつたから、6月末までの1カ月は、しっかり向き合うことで何かを見つけたいと思う。

そして悩みまくったのもこの月。

どう生きたらいいのか。将来のこと。今のこと。過去のこと。

いつもそうなのだが、悩むと止まらない。何でもかんでも、解決するまでとことん頭を抱える。抱えて抱えて、生きることがわからなくなって、たまに身動きが取れなくなることがある。それが今回だった。ここから脱出する方法は、一番下まで落ちた時に、友達に電話をかけること。行動を起こして現状を変えるという方法もあるが、そのタフさはどうにも持ち合わせていない。それはこれからちょっとずつでも身に付けたいものである。とりあえず、そんなこんなで回復した。留学にいったからこそ悩んだこと、ではないため、今回その悩んだことについて直接は触れずにいようと思う。

自分が生きているのは、周りの人のおかげでしかない。周りの人がいなくなったら、きっとずっと前に生きるのをやめていると思う。

用事やトラブルで授業を連続で休んでいたのに、「体調とか大丈夫？顔見なかったから心配したよ。」と声をかけてくれる教授。

書類の提出毎回毎回遅れるのに、出した後には「元気していますか？」って一言添えてくれる国際課の方々。

LINE返すのめっちゃくちゃ遅くなっても、それを気にせずすぐに返してくれる友達。

そんな小さくも、とても大きな温もりで溢れたものが、自分が日々生きていられる理由なのだと感じる。最後に、最近どこかで見た文章を引用してこの報告書を締めようと思う。

もしこの世に神様と呼べる何かがあるとすれば、それは人と人との間に存在するものなのではないだろうか。